



撮影＝飯島 隆

んですが、何といっても3幕です。3幕では、今回も舞台上で雪が降ると思いますが、とにかくブッチーニが寒々しい音を作る、病気のミミを表すような音も。実はこれを台詞だけでお芝居をしても、そこまで凄いドラマチックにはならないです。ところがオーケストラが鳴ると、ミミがどれほどの病気なのかがわかるし、ロドルフォが、“ミミと別れようと思う”という話をするときに、その言葉が本心ではないということが音楽でわかる。音楽によって、元々ある脚本の何十倍も感情が伝わる。本当にすごい3幕だなとつくづく思います。

観客を憧れの地へ連れていってくれる

玉木 舞台装置や衣裳はイタリアで製作されていますね。

佐渡 今回の演出家ダンテ・フェレッティさんにはまだお会いしていないのですが、やはり専門が美術、衣裳デザインで、そこはすごくこだわりがあると。装置はアイデアを見せていただいて、模型も見ました。

玉木 原作では屋根裏部屋という設定が、フェレッティさんの演出では船の上になります。



佐渡 私はパリに17年いましたが、今もセーヌ川で船に住んでいる人はたくさんいるんですよ。

玉木 日本でも1960年代までは東京の隅田川で船の上で生活している人はたくさんいました。若尾文子さん主演の映画にもなっています。

佐渡 また、当たり前のようにパリが舞台となっていますし、イタリアとパリなんて、今では近いじゃないかと思うかもしれませんが、当時の人にとってみれば“花の都パリ”。そこへ、この2時間の間に連れていってくれるんです。その他にも「蝶々夫人」は日本、「トゥーランドット」は中国、という風に劇場にしながら、観客を憧れの地へ連れていくというのがブッチーニの狙いですよ。

玉木 そして今回、演出に期待しているのは、ミミのとらえ方。昔は可愛くて純情で、愛する男性に出会えたけれど、不治の病の弱々しい女性という描き方だったのが、このごろの演出はだいぶ違うんですよね。ろうそくの火を自ら吹き消して火をもらいに行ったり、自分からロドルフォに仕掛けていくという。さて今回はどんな風な青春像をダンテさんが作ってくれるのか。

佐渡 ものすごく短い時間に二人が会って、階下で友達を待たせている間に恋人になってしまうのですから、不思議っちゃ不思議ですよ(笑)。ミミは出会った時ではなく、もっと前からロドルフォ達のことを知っていたと考えられます。直接の知り合いではなかったけれど、知っていた。なので、自ら仕掛けていくというのはあり得るんです。

人の生の声が直接グサッとくるのが醍醐味

玉木 今回は、日本の実力ある歌手たちに加え、海外の若い歌手達がキャスティングされています。

佐渡 すごく良いクオリティの歌手というのはもちろんなんですけれど、特にこの「ラ・ボエーム」では、若く才能のある人たちを呼びたいと思っていました。ミラノでのオーディションは本当にレベルが高かったです。

玉木 ところで、佐渡さん自身が「ラ・ボエーム」に出会われたのはいつのですか？

佐渡 関西二期会で副指揮をやっていた時かな。私の母親は